

第2章 | 2050年代への展望

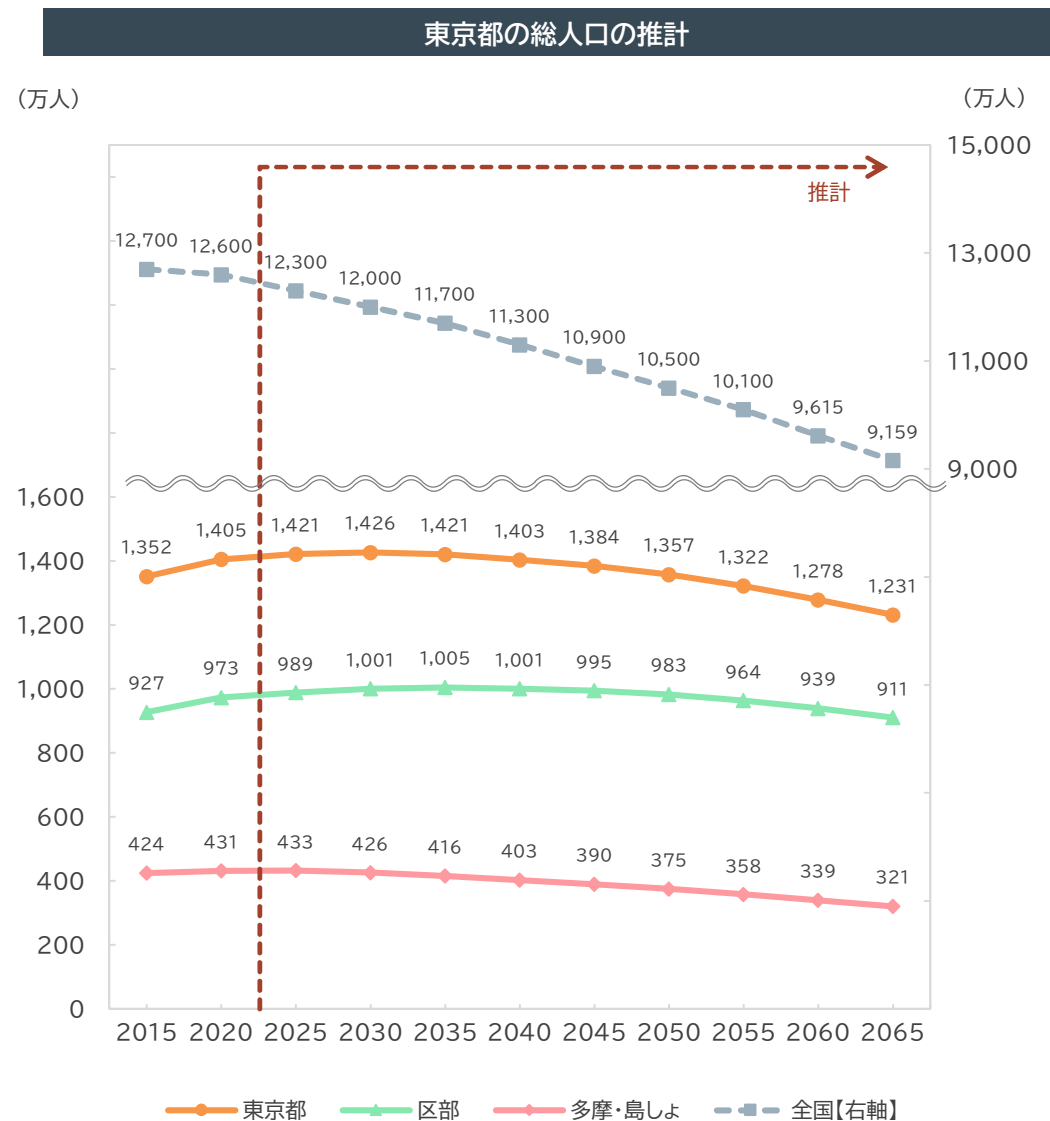
01 東京の人口予測

(1) 人口は2030年をピークに減少局面へ

東京の人口は、2030年の約1,426万人をピークに減少に転じ、2050年には約1,357万人となることが予測されています。

地域別に見ると、既に減少局面にある多摩・島しょ地域に加え、これまで人口を維持してきた区部においても、2035年を境に減少へ転じるなど、時期や速度の地域差を伴いながら、人口減少の波が段階的に波及していく見通しです。

2050年代を見据えると、人口増加の潮流が反転し、区部を含む都内全域が例外なく本格的な人口減少社会へ移行することになります。



出典：東京都政策企画局「2050東京戦略」を基に作成

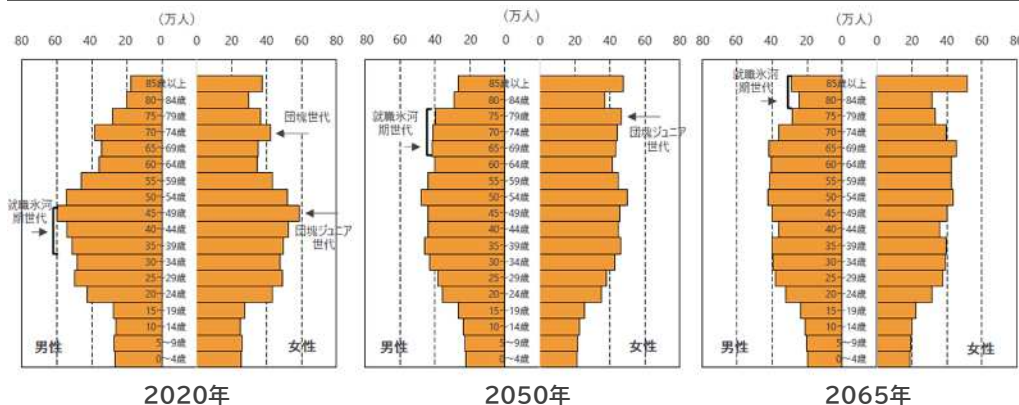
第2章 | 2050年代への展望

(2) 2050年代には約3人に1人が高齢者に

東京は、人口減少と高齢化が同時に進行する未曾有の局面を迎えており、2050年には高齢化率が29.3%に達すると予測されています。この2050年代を境に、これまで増加を続けてきた高齢者(65歳以上)を含め、全ての年齢階層で人口が減少に転じると見込まれています。

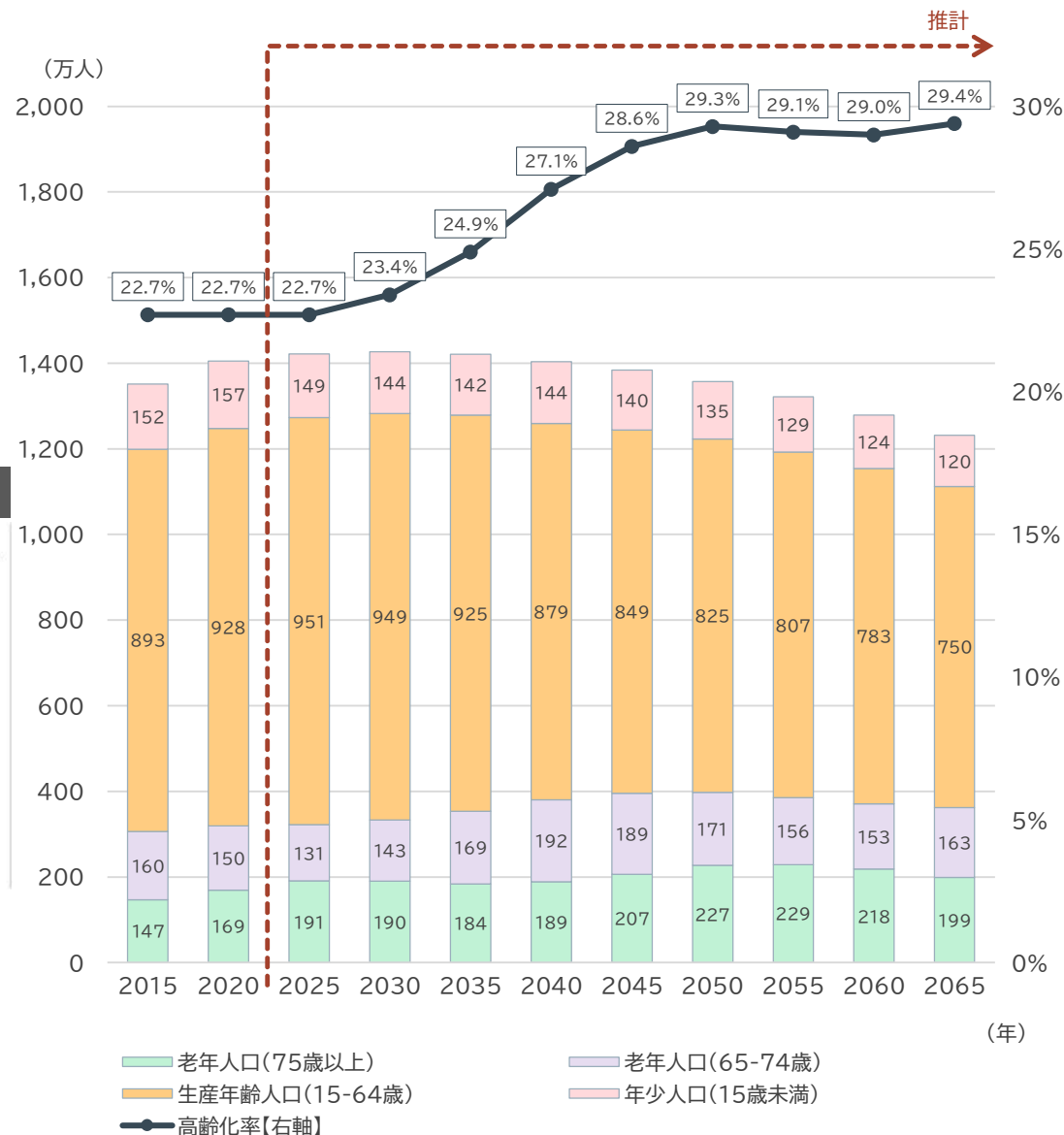
今後、さらに少子化が一段と進行し、将来的な年少人口及び生産年齢人口の減少を一層加速させることが懸念されています。

人口ピラミッドの推移



団塊ジュニア世代が75歳を超える2050年には、年少人口の割合が低く、老年人口が膨らむ「つぼ型」となります。さらに、団塊ジュニア世代が90歳を超える2065年には、85歳以上の人口割合が突出し、それ以下はボリュームゾーンのないだらかな形状に近づいていくと予測されています。

東京都の高齢化率と年齢階級別人口の推計



出典：東京都政策企画局「2050東京戦略」を基に作成

02 社会状況や技術革新の展望

2050年代には、国際交流の更なる活発化や技術革新などにより、世界との垣根がより低くなり、都市活動もこれまで以上に多様化していくことが見込まれます。技術の進展や社会実装には不確実な要素が存在するものの、変化に柔軟に対応しながら新たな成長や豊かな暮らしにつなげていくことが重要です。本節では、今後の都市づくりを考える前提として、想定される社会状況や技術革新の姿を展望します。

(1) 社会状況の見込み

1) 海外の企業誘致や人材の受入れが進展し、往来が活発化

多言語対応や高度なコミュニケーション技術の浸透により、外国人との円滑な交流が日常化しています。高度専門人材をはじめとする外国人人材の中長期滞在が進み、都市の活力やイノベーションを支える重要な担い手となっています。

インバウンドやMICEも都市活動として定着し、世界の多様な人々が季節を問わず行き交う空間が広がっています。こうした交流を支える生活・ビジネス環境が、世界から人材や投資を惹きつける開かれた国際都市の基盤となっています。

2) 高齢者や子育て世代の社会参画や外国人との共生が進展

移動を支える技術の普及やバリアフリー化の進展により、誰もが生涯にわたり社会とのつながりを持ち続けられる都市環境が広がっています。様々な不安を抱える人たちが健康を前向きに捉え、地域から孤立することのない暮らしが広く浸透しています。

また、異なる国籍や背景を持つ人々が地域の担い手として共に暮らし、出産、子育て、介護などのライフステージの変化を地域全体で支え合うインクルーシブな社会が進展しています。

3) 価値観の多様化とライフ・ワーク・バランスが実現

多様な価値観に基づくライフスタイルが広く受け入れられ、働く場所、住む場所、地域との関わり方を柔軟に選択する動きが進んでいます。職住のバランスや時間の使い方は、個々の生活リズムに応じて多様化しています。

デジタル技術や身近な生活圏の機能充実により、移動や手続きに要する時間が減少し、生み出された時間を、家族や地域との交流、学び、創造的活動、自己投資などに活用する暮らし方が広がっています。

4) 人生100年時代を迎え、住まいの選択と循環が進展

人生100年時代を迎え、長い人生の中で変化するライフステージや世帯構成に応じて、一人ひとりがその時々自分にふさわしい住まいを選ぶことが一般的になっています。

こうした選択を支えるように、住まいは手入れを重ねながら、次の住み手へと引き継がれ、世代を超えて大切に使われ続けています。

5) 暮らしが潤う創造的な芸術・文化活動が増加

道路、公園、広場などの日常的な都市空間において、芸術・文化活動が身近に展開されるようになっていきます。生活の延長線上でアートやパフォーマンスに触れ、自らも参加する営みが、まちの魅力的な景観を形づくっています。

建物や公共空間における創作活動、地域に根ざした文化活動などが、暮らしに豊かさや潤いをもたらす、地域の魅力として定着していくことが見込まれます。

7) 自然災害の激甚化や感染症など新たな危機にも対応

酷暑や豪雨などの自然災害が日常的なリスクとなり、都市には、過酷な自然環境にしなやかに適応していくことが求められています。大規模地震や感染症など、複数のリスクが重なり合う複合災害への備えも重要性を増しています。

こうした中でも、都市のあらゆる空間で安全性が確保され、日々の暮らしや都市活動が分断されることなく継続できる都市に近づきつつあります。

6) 伝統や個性が生活に浸透し、シビックプライドを醸成

台地、低地、河川、水路、江戸期からのまちの骨格、昭和期以降の建築ストックなどが重なり合い、地域固有の個性を形づくっています。歴史や文化は、現代の暮らしの土台として受け継がれ、人々の日常に息づいています。

地域の物語に寄り添いながら暮らしを重ねることは、成熟した都市景観を生み、まちへの誇りや愛着を育む源泉となります。こうした個性を次の時代の価値へ磨き上げることが、東京ならではの魅力につながります。

8) 国内外をつなぐ陸・海・空の広域的なインフラが充実

リニア中央新幹線や空港機能の拡充などにより、国内外の主要都市との時間的・空間的距離は一層縮小し、各地域のつながりが強まっていきます。道路、鉄道、空港、港湾などの広域インフラは、人・モノ・情報の交流を支える基盤として重要性を高めています。

三環状道路をはじめとする道路ネットワークの充実や、舟運などの水上交通ネットワークの強化により、首都圏全体の一体性が高まります。さらに、自動物流道路や先端技術の実装により、物流・人流の効率化及び高度化が進み、都市活動を支える基盤機能が強化されていきます。

02 社会状況や技術革新の展望

(2) 技術革新の見込み

1) 自動運転が広く普及し、公共交通への活用が拡大

自動運転バス、デマンド交通、自動配送車等が地域の特性に応じて普及し、人手不足の中でも人やモノが滞ることなく都市を循環しています。高度な制御技術により、交通事故や渋滞は大幅に減少し、昼夜を問わず、誰もが安全で快適に移動できるとともに、必要なモノを必要な時に受け取ることができています。

無人モビリティが安全にまちを巡ることで、車道や駐車スペースの一部は、緑や歩行者のための空間へ再生されています。事故や移動の不安が軽減された人中心の道路空間では、子供から高齢者まで誰もが思い思いに過ごす光景が広がっています。

3) AIやロボット技術、ヒューマノイドがゆとりを生み社会課題を解決

まちなかや家庭では、自律型ロボットやヒューマノイドが、人の良きパートナーとして日常に溶け込んでいます。身体的負担の大きい作業、危険な仕事、生活に密着した支援などを先端技術が担うことで、人々の暮らしはより安全で快適になっています。

こうした人とロボットとが調和する関係は、我が国の価値観や文化的土壌にも支えられ、社会に自然に受け入れられています。労働や煩雑な業務に費やす時間が減り、生み出された時間をケア、創造的活動、自己投資などに活用することで、社会の活力を高める循環が広がっています。

2) 多様なエネルギー利用やゼロエミ技術が進展

建築物の屋根や壁面、島しょ部における海風、地熱など、それぞれの地域が持つ多様なポテンシャルが、分散型エネルギー源として活用されています。これらはエネルギーネットワークを介して最適に制御され、災害時や厳しい気象環境下でも都市機能を支える基盤となっています。

モビリティや建築物の脱炭素化により、排気ガスや廃熱が抑制され、まちには快適な空気と穏やかな時間が生まれています。廃棄物を資源へ戻す循環や、水を巡らせて熱を逃がす仕組みが、先端インフラとしてまちの裏側に組み込まれています。

4) ICTの進展により暮らしの豊かさや効率性が向上し、MaaSでシームレスな移動も実現

まちなかのあらゆる空間が情報ネットワークとつながり、移動中も途切れることのない通信環境が確保されています。必要な情報やサービスは、個人の行動特性に応じて自然に提供され、情報の最適化が人々の生活にゆとりを生み出しています。

また、決済や発券を意識させないMaaSにより、オンデマンドモビリティをいつでもシームレスに利用できるようになっています。終電や交通空白地の制約から解放され、移動時間を仕事や趣味に活用しながら自由に行き交う暮らしが定着しています。

5) DXやAIを支えるデータセンターが社会インフラとなり、都市に標準装備

日常のあらゆる場面でデジタルサービスが自然に提供される中、その基盤となるデータセンターは、社会インフラとして都市に組み込まれています。周辺のまちと調和しながら配置され、高度な自動運転やデジタル決済などを24時間支えています。

データセンターは、都市活動を支える基盤として、一人ひとりの暮らしの安全性や利便性を守る身近な社会インフラとなっています。

7) 次世代エアモビリティにより日常生活での自由な空の移動を実現

空飛ぶクルマやドローンが活用され、移動の舞台は三次元へと広がっています。地上の混雑、地形の制約、災害時の道路途絶リスクなどに左右されにくい空の道が、各拠点を結び、移動の確実性と継続性を支えています。

人やモノの移動が空へ拡張することで、物理的な距離や移動制約の壁が小さくなっています。空のタクシーで各地の自然や文化を上空から眺めたりするなど、新たなライフスタイルが見られるようになっていきます。

6) VRやメタバースが浸透し、リモートと対面を自由に使い分け

VRやメタバースなどの仮想空間技術が実空間とつながり、身体的制約、移動時間、場所に縛られない交流や社会参加が広がっています。誰もが自分の居場所を見つけ、社会的に孤立しにくい環境が整っています。

効率的な情報伝達はデジタル空間で行う一方、対面の場合は五感を通じた体験や深い共感を分かち合う空間として価値が再定義されています。目的に応じて最適な場を選べる暮らしが、人々のウェルビーイングを支えています。

8) 最先端の技術による新たな景観の形成

建物壁面を活用したデジタルアート、空間に浮かび上がるホログラムなどが、都市の景観に新たな表現のレイヤーを重ねています。まちは時間や季節の移り変わりとともに表情を変えるショーケースとなり、回遊やにぎわいを生み出す価値を創出しています。

歩行者は、まちに埋め込まれたデジタルサイネージなどから必要な情報を受け取りながら、先端技術によって拡張された伝統芸能や現代アートを身近に体感しています。まち歩きそのものが、文化的・感覚的な体験へと進化しています。

人と先端技術が共生する社会の基盤

～文化的土壌と社会受容性を背景に、人とAI・ロボットが共同し、都市価値の創出へ～

近年、AIやロボット技術、デジタル技術の急速な進展により、人と技術の関係は大きく変化しつつあります。

従来は、技術が人の仕事を代替するものとして捉えられる側面もありましたが、現在では、人の能力を補完し、暮らしを支えるパートナーとしての役割が重視されるようになっていきます。

こうした中、日本社会においては、技術に対する受容性の高さが一つの特徴として指摘されています。

例えば、アニメや漫画などの文化においては、ロボットや人工知能が人間と対立する存在ではなく、身近な存在として共に生活する姿が描かれてきました。こうした背景は、人と技術が調和し共存することに対する心理的な抵抗感を和らげ、先端技術を日常生活に自然に取り込んでいく素地となっていると考えられます。

東京においても、AIやロボットといった先端技術を社会課題の解決に活用しながら、人との協働を前提とした都市づくりを進めていくことが重要となります。高齢化の進行や人手不足への対応、都市活動の高度化など、多様な課題に直面する中で、技術を単なる効率化の手段にとどめるのではなく、人々の暮らしの質の向上や新たな価値の創出につなげていく視点が求められています。

今後は、こうした人と技術の調和的な関係を都市の中に実装し、誰もが安心して技術の恩恵を享受できる社会を実現していくことが、持続可能な都市づくりにおいても重要な要素となります。

